

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

### 2013 年度第 3 回研究会報告書

東アジア・東南アジア大陸における文化圏の形成と他文化圏との接触—タイ文化圏を中心として—

平成 25 年度第 3 回研究会

日時： 2013 年 10 月 12 日（土）午後 1 時 00 分から 6 時 30 分

場所： 東京外国語大学 AA 研棟マルチメディア会議室（304）

報告：

1. 伊藤 渚（総合研究大学院大学 文化科学研究科院生）  
「ラオス北部サムヌア・サムタイ地方の織物生産と家」
2. 長田紀之（アジア経済研究所リサーチ・アソシエイト）  
「英領ラングーンにおける都市複合社会の変容とビルマ国家の出現」

#### 1. 「ラオス北部サムヌア・サムタイ地方の織物生産と家」

本発表では、ラオス北東部フアパン県サムヌア・サムタイ地方に住むタイ系諸民族の村において、織物生産がいかに社会的文脈に埋め込まれた技術であるかを、織物と家との関わりから示す。ここでいう家とは、現地語の「フアン」である。フアンとは家族が寝食をともにする具体的な場であるところの家屋である。

本発表の調査地はフアパン県サムヌア郡及びサムタイ郡に所在するタイ系諸民族の村である。サムヌア・サムタイ地方は織物の盛んな地域として知られている。現在、手織布や手織布から仕立てられる民族衣装の筒型スカート「シン」は「ラオス」の象徴となっているが、同地方はそれらの主要な供給地となっている。本発表の対象は、そこで織物活動に関わる女性とその家族である。同地の織物は、女性の仕事である。サム川流域地のタイ系諸民族の女性たちの中には、織物が商品化する以前から、織物ができることに高い価値を置く傾向があった。同地における織物は、女性の日常生活の中に埋め込まれた活動であり、贈与による社会関係の形成や女性性の構築に深く関与する重要な文化要素のひとつであったし今もあり続けている。発表者の調査村では、すべての女性が織物生産に関わっており、織物は特別な技能ではない。しかし、彼らは、まず、水田農耕や焼畑を行う農業民であり、織物を専業で行っているわけではない。織物は農作業や家事と同じく、女性であれば誰もが行うごく当たり前の仕事として、他の仕事の合間に行われる。女性であれば誰もが行う日常の仕事だという点が、

同地における織物の特徴である。

織物という技術が、調査地の女性メンバーにひろく一般的に習得され行われている理由のひとつは、織物が村における人生において最も重要な節目である結婚と深く関わっているからである。女性たちは、結婚に先立ち、持参財として各種の布を用意する。持参財の品目や結婚式の過程は結婚とは新しいメンバーを家屋に迎え入れるプロセスであることを示唆しており、家屋とその居住メンバーである家族、そして織物に関連があることがわかる。家屋、家族と織物との関係をうかがわせる事象は葬送儀礼や日常生活の中にも見出すことができる。本発表では、日常生活の中で行われている織物生産や結婚・葬送儀礼等の具体的事例の分析を通じ、織物という技術が、家屋とその空間で寝食を共にする同居家族と密接に結びついており、そのような意味で社会的文脈に埋め込まれた技術であることを示す。(伊藤 渚)

## 2. 「英領ラングーンにおける都市複合社会の変容とビルマ国家の出現」

本報告では、本年1月に東京大学に提出した博士論文の概要を述べる。1948年の独立以来、ビルマ（ミャンマー）の国民国家は土着諸民族の集合体として想像されてきた。そこから除かれたのは外来とみなされる人々であった。土着民族と外来民族の区別は国家の基本的枠組みとして現在に至るまでビルマの社会を強く規定している。私が博士論文で問題としたのはこうした事態の植民地的起源である。視点は、19世紀後半から1930年頃にかけてのイギリス植民地期ビルマの首都ラングーン（ヤンゴン）に据えられる。植民地期のラングーンにおいて大量の流動人口に対処するために構築された諸制度の検討から、ビルマの領域の内外を分かつ制度や範疇が生成される過程を論述する。その過程はまた、同時代の他の多くの植民地港湾都市と同様に、国際市場と後背地の双方に向けて開かれ、多様な要素から構成されるコスモポリタンな場であったラングーンが、次第にビルマ国家の閉じた枠組みの中へと包摂されていく過程でもある。本報告では、こうした変化の中で都市社会に暮らす多様な人々の生活にも注意を払い、1930年の大規模な反インド人暴動を準備した都市社会の構造にも言及する。これらから、植民地期を通じた植民地主義とナショナリズムの相互作用によって、「領域に基づく国家」の像と「人種・民族に基づく国民」の像はずれを含み込みながら重なり合い、土着民族と外来民族を区別する独立ビルマの国家枠組みを形作っていったという歴史像を提示する。(長田紀之)

各発表に対して活発な質疑応答がありました。伊藤氏の発表については、調査地を選定した理由、技術や技能の定義、織物文様が社会でもつ意味などに集中した。また、生活に織物が定着する理由として結婚との結びつきが挙げられているが、機織を可能にする条件を重視すべきではないかという意見も出ました。長田氏の発表に関しては、境界管理の概念、複合社会やビルマへのインド人移民と英国帝国内の移民問題が議論の中心となりました。(唐立)